

俳人 成田千空研究会

千空研究

終刊号 第20号

女房や湯気の匂ひの年の暮

—千空句版画—

藤田 健次

第3句集『天門』から。「湯気の匂ひ」を絵でどう表現するか、あれこれ悩む。結局、この句はエロチシズムなのだと割り切り、こんな図柄にしてみた。女房が風呂からあがってきた。「あたしも一杯いたたくわ」。二人並んでビールを飲む。今年もいい句がたくさん出来た。スケジュールは、もうすでにいっぱい。来年もまた忙しくなりそうだ。窓の外を見ると、いつの間にかばた雪である。こうして、夜はしんと更けてゆく。

(版画家・会員／八戸市)



成田千空句「女房や」Kenji

目次

女房や湯気の匂ひの年の暮

—千空句版画—

藤田 健次

1

千空対談(1)を読んで

—回想のなかの人々—

未津 きみ

2

解散にあたりご挨拶

佐々木達司

3

千空俳句入門

—「合本 成田千空句集」を読んで— 鎌田美正子

4

新資料とともに(3)

俳人木村九折と成田千空

齋藤 美穂

6

千空先生に俳句を習う⑦

千空さんが遺したもの

世良 啓

7

宮川翠雨と暖鳥俳句(下)

西谷ともえ

9

〈千空点描〉病床吟

辻 桃子

11

〈作品鑑賞を読む〉⑩

秋ふかき酒の肴に蛸の疣

辻 桃子

12

〈成田千空資料再録〉⑩

太宰治と俳句について

太宰治を詠んだ千空句

11

昭和俳句の命題

千空 白鳥の句

13

千空 白鳥の句

千空 白鳥の句

14

備忘録

10

19

『千空研究』総目次

15

執筆(引用)者索引

18

寄贈感謝・会員名簿・北極星

19

千空対談(1)を読んで

— 回想のなかの人々 —

未津 きみ

先日古書店「らせん堂」で、ある一冊の本に出会った。

それは二〇〇一年七月二十九日に発行された「文芸あおもり」第一四八号だった。頁をめくるやいなや、わが「北狄」の面々が写っていた。服部進、牧ひろし、伊藤百合子、それに私を含めての七人、しみじみと若い彼等を眺めていた。

「北狄」は、青森県文芸協会より第22回文芸協会賞を受賞したのであった。この写真には見覚えがあったし、また授賞式には私も出席していたのに、何故かこの本が手許にないのだ。おもわず「らせん堂」主人に私はこぼした。なぜないって。主人も困り顔である。おそらく私の家に棲みはじめた「座敷童子」が匿したのでらうと、最近とみに物たちが見え隠れするのでそうおもうことにした。

この日「らせん堂」で、私は遠い以前から欲しかった多田智満子の本を三冊入手することができた。そして「文芸あおもり」である。

ここで多田智満子に関して一言書きたい。彼女は詩人であり翻訳家であり、詩も学識の深さをにじませるものが多い。また本邦初訳のユルスナール著「ハドリアヌス帝の回想」を読んだのは、はるか彼方のことであった。古代ローマの王、ハドリアヌス帝の風姿はこのいまでも私の眼底深く、座を占めている。また多田は樹木にくわしく、エッ

セイ集「十五歳の桃源郷」も今回ようやく手にすることができた。「らせん堂」という古書店は、小さな店であるのに、深い本の森に入ってゆくような雰囲気、迎えてくれる。なにかしら出逢いのある店である。一言つけ加えたい。

さて「文芸あおもり」第一四八号は、特集として「詩人 村次郎」を取りあげ、千空対談(1)中寒二となっている。対談のお相手が私の尊敬する詩人中寒二氏とはと、短詩型文学の巨頭一人が村次郎をどのようにさぐるのか、興味のつきないところである。

私は五十代ではじめて詩集を上梓した。そのとき、東奥日報紙上にご批評を依頼したのは中寒二氏であった。一面識もなく、非礼を承知でのお願いであった。心をこめてのご批評は、私が小説から詩へ移行したことにも触れていた。詩人として後輩を誉めもせず、けなしもせず、指導する大らかさと、表現が詩的なイメージの強い批評であった。翌年の第二詩集もまた中氏にご批評を依頼し、心よりお受け下ったことに、いまでも感謝している。



「文芸あおもり」148号掲載の千空対談

さて千空対談の両詩人はまさに一幅の絵であった。眼光鋭く、それでいてどこか哀しみの風が漂い、それは年経て立つ古木のようなでもあった。二人の言葉のやりとりは、あたかも言葉の綾取りで、豊富な知識の泉であった。芸術全般はもとより、あらゆる分野に造詣が深く、どちらかというとき千空氏がリードしているようだった。それは千空氏の持っている領域の広大さと滋味の豊かさによるものだろう。それも村次郎と呼応しているようでもあった。

以前に読んだ堀田善衛の「若き日の詩人たちの肖像」で、如何に村次郎が語られていることか。その存在の大きさに触れることができる。私は、かつてこの一冊で村次郎を表徴的に確実にとらえたことを告白するものである。

村氏は四季派の詩人で、フランス表徴派の手法で貫かれている。またヴァレリーの持っている海への強い憧憬が一貫して村氏のなかに貯造されているとのこと。すぐれたお二人の洞察力で、村次郎という詩人の全貌を対談で知らされた。

また反面、村氏は素朴で終生少年っぽさを保持されたとのこと。これには私は驚いた。村氏の反面を知ったとき、あらためて私の若い日のことをおもわずにはいられなかった。

かつて私は村氏の営む石田屋旅館に、三度泊まっている。むろん私のような者が泊まれるような宿ではない。職場のエライさんの抱持ちであった。夜の宴会も八戸支店側の招宴ではなやかなものであった。芸者衆の踊りを見ながら、私は末席で小さくなっていた。心は常に、村次郎のことばかりであった。へここには村次郎がいると、そ

解散にあたりご挨拶

当研究会は5年前、千空評伝の刊行を目的として発足し、資料収集、聞き取り調査、会報発行など行ってきました。

皆さま方のご協力により、『成田千空伝——大粒の雨降る青田母のくに——』『合本 成田千空句集』刊行、『中村草田男訪問記』『千空句帖』『わが心の千空』をブックレットとして、また『千空研究』も20号まで発行することができました。

当初3年の計画が5年に延びましたが、一定の成果を得られたと考えています。期間限定の研究会ですので、今年末をもって解散いたします。

長い間のご支援を心から御礼申し上げます。

今後は成田市子夫人から寄託されています千空資料を整理し、できる限り青森県近代文学館に収め、研究に資したいと考えています。

今後も千空俳句が読みつがれ、人間千空が語りつがれることを願ってやみません。

2019年11月20日

俳人 成田千空研究会

代表 佐々木達司

のことが、芸者衆の踊りも美味しい料理も私を引き付けることはなかった。出来るものならその人に会いたい、それだけだった。しかし、村次郎に会うほどの作品書いていないというおもしろい。しかし、村次郎はとも気さくな人で、彼の小さな書斎に人々を招き入れたとのこと。この書物に埋もれての書屋には、内外の有名人も訪ずれている。私の弱気、積極性のなさはどうにもならない欠点である。

後年、私と同じ職場の人であった村次郎氏の弟さんに、ついせんだってある会合でお目にかかった。村井村治氏である。

「兄に会わなかったのですか。宿に泊まったのに。どうしてですか」

私は一言、「会いにゆけるほどの詩人でないものですから」と、応えるしかなかった。けれど、誠に残念の極みである。

「北狄」の文芸協会賞授賞式に出席したとき、千空氏が代表の服部進に、未津きみはどうしているのかとたずねられた。かつて「暖鳥」の同人であったからであろうか。

「いや、本日出席しています」と応えられ、私は服部にうながされ、千空氏に挨拶に席まで伺った。四十年ぶりに近い再会であった。私のおおじ根性で、千空氏の傍へも寄ることもできずにいたのだ。それに私のことなどお忘れのこととおもっていた。「やあ、これだば街中であつても分らないなあ。昔とすっかり変わったね」と言われた。

「詩を発表しているようだが、また小説を書いて下さいよ。あんだの「新潮」や「文芸」に載った作品は読んでいますよ」

私は緊張し、のぼせあがり、嬉しかった。なに

よりも私の胸に響いたのは、俳句を書きなさいよと言われなかったことである。千空氏の寛容に打たれていた。やはり氏は、昔のまま春風駘蕩の人であった。

大粒の雨降る青田母の故郷

この句に私が出会ったのは、句が発表されてから何年も経ったことである。二十二年の作とのことである。この大らかな青田のみずみずしさ。農耕民族の持っている稲作への限りない親和力、水と土と太陽のエネルギーにみちている。どうにもならない力で読む者を魅了してしまう。そして大らかさがある。私は千空氏の作品をこの頃殆ど読んでいないのに、これは氏の代表作と決めつけていた。私の直裁的な性格は、こんなとき発揮されてしまう。

そして後年、この句の「母の故郷」は、飯詰であると知らされた。私のなかで赫々と燃えるものがあった。飯詰は私の母の故郷であった。この句に向かう私の気持は燎原の火のように燃えて、走った。

飯詰は幼年のときから、一夏をよく過ごした、いわば私の第二の故郷のような土地だった。終戦の日一九四五年八月十五日も、十四歳でこの村で迎えた。これは一生、私にとって忘れることのできないことである。「新潮」に掲載された作品も、舞台は飯詰である。

晩年の千空氏に、年に一度の文芸協会の会合でお会いする機会に恵まれたことは、私の喜びであった。あれは神が仕組んだ仕業なのかと、いまになってふと思うときがある。

(詩人／青森市)

千空俳句入門

—『合本 成田千空句集』を読んで—

鎌田 美正子

一. はじめに

津軽が生んだ蛇笏賞作家・俳人成田千空の『合本 成田千空句集』が刊行された。本文と巻末の索引に収められた俳句をもとに、千空俳句を私なりに分析することができたので、その結果を簡単に纏めてみたい。特に、生前から風土俳句と呼ばれていた千空の俳句の特徴が少しでも浮き彫りになれば幸いである。

一般に俳句の基本要素として有季、定型、切れ字が挙げられる。従って、まず千空が詠んだ季語を分析し、どんな季語が多く詠まれたかについて触れる。それらの例句から、千空の五感を通して詠まれた津軽の風土を味わってみたい。次に千空俳句の型を大きく五つに分類し、句型から得られる千空俳句の読みやすさや調べの良さを把握してみたい。それには切れ字が不可欠なので、どんな切れ字がどのように使かわれていたかを調べる。

次に、風土のどんなモチーフをどのような言葉で表現されていたかを検索する。特に、津軽地方に特有な地名や方言(津軽弁)などに絞って分析してみた。

以上の四項目を通して風土俳句の根拠となるべき千空俳句の特徴を述べてみたい。

二. 季語

今回検索した句の総数は2904句。内訳は春

603句、夏731句、秋661句、冬819句(約28%)、新年90句である。冬の句が一番多いのは雪の多い津軽と関連していた。因みに、詠まれた季語の総数は864語で、春173語、夏250語、秋197語、冬199語、新年45語であり、季語の分布において極端な四季の偏りはなかった。各季とも時候、天文、地理、人事、動物、植物と六区分に分けたが、大事な季語は万遍なく各区分に網羅されていた。津軽に住む者としては、身近な歳時記の一つとして十分に使える季語の多さである。

最も詠まれた季語の例句は雪の147句。次に白鳥49句、ねぶた37句、春21句、蝶21句、青葉21句、月21句、五月20句、林檎20句、稲20句、北風20句、吹雪19句、新年19句の順である。因みに、桜13句、花16句で合わせると29句と四番目に多い季語となる。いずれも北日本に住む者にとって関わりの深い季語である。代表的な例句を列挙する。鑑賞は省くが、千空独特な抒情に溢れている俳句が多い。

降る雪の舞ふ雪となり花となる

白鳥の飢ゑのうら声風のこゑ

佞武多いま沸点にあり鈴しぐれ

咲くちから散るやすらぎも桜かな

妻の眉目春の竈は火を得たり

水去来人また去来初の蝶

墓穴まで友を見送る青葉中

月の夜や蟹歩きして古書漁る

五月来る夜空の色のインク壺

子の顔もりんごの仲間林檎園

三. 句型

俳句は上五(五音)、中七(七音)、下五(五音)で

構成された我が国特有の十七音の短詩である。本稿では、上五が切れ字の「や」で終わる句を一型、中七が切れ字の「や」で終わる句を二型、下五が切れ字の「かな」で終わる句を三型、下五が切れ字の「けり」で終わる句を四型、その他、どれにも当てはまらない型を五型と分類して分析を進めてみた。

その結果、一型289句(約10%)、二型85句、三型187句、四型53句、五型2290句(約79%)であった。最も多かった五型では、下五名詞止めのいわゆる句の体言止めは1300句(約57%)であった。一方、動詞の終止形止めが378句(約17%)と意外に多かった。

一般的に一型から四型までの型は、俳句で感動を表現するための基本型と言われている。それ以外の五型の句が最も多かったということは、基本型を土台にしながらいずれも五型の応用型を駆使して句作した結果と思われた。難解な句型もあるが、俳句を学ぶものにとっては格好の教材となろう。五型についてはさらに詳細に分析する必要がある。

句型の代表的な千空俳句を列挙する。

身にしむや米ならばよき十三の砂(一型)

横顔は十に七つや花林檎(二型)

凄まじき月光となる個室かな(三型)

酷寒のにはとり紙を喰ひにけり(四型)

大粒の雨降る青田母の故郷(五型)

熱帯夜ねむりては師のあらはるる(五型)

風呂敷は自在の広さ東風吹けり(五型)

童子あり熱き彼岸の団子あり(五型)

眠りやすく覚めやすき母合歓淡し(五型)

奥漬の酸きこそよけれ盆の家(五型)

四、切れ字

俳句は十七音の最も短い詩であるので省略法が駆使される。そのために最も多用されるのが切れ字である。千空俳句における代表的な切れ字の使用頻度を調べてみた。

前項でも触れたが、切れ字の「や」は合計403句(約14%)、「かな」は合計191句、「けり」は合計64句であった。「や」が一番多かった。散文的にならないように、「や」でしっかりと言いつつ留め、しかも、そこで詠嘆していることがわかる。ただし、切れ字の「や」と「かな」の重複例はなかった。

その他、形容詞の語尾の「し」は155句、打消しの助動詞「ず」33句、「なり」20句、「たり」13句であった。一方、助詞の「ぞ」は9句、「よ」は37句であった。

切れ字十八字という言葉があるが、他の切れ字は省略する。千空は句を単一化し詠嘆するために切れ字を沢山使ったと思われる。

雪眼して寂光界をゆく母や

四温かなベン肝臓一つ芽のかたち

大いなる虹立ちにけり檜葉の国

林檎甘し酸し光陰はただ迅し

烈風の地を摩りやまず去年今年

友とるて花の天蓋そよぐなり

摩天楼崩れ落ちたり星飛び

木を見分け鳥を聞き分け澄む秋ぞ

雪嶺よたたかふ若きナースたち

暗きまで赤きつつじよ終の家

五、言葉

千空俳句を読んでいると、句の中に千空が暮らした津軽地方に特有な地名や行事名、人名、方言

(津軽弁)が惜しみなく出てくる。なんら気取ることなく、ストレートにこれらの言葉を句の中に回転している。津軽の風土をこよなく愛し、津軽の風土を詠んだ俳人ならではの感が強い。以下に列挙してみたい。

津軽(つがる、東目流を含む) 29句、岩木17句、十三9句、みちのく6句、白神4句、深浦3句の他、西浜、市浦、目屋、五能線各2句と続く。行事としては佞武多(ねぶた、ねぶたを含む)が圧倒的に多く、合計35句にも及ぶ。人事ではストープ列車が6句もあった。五所川原から金木を通って中里まで走る津軽鉄道(走れメロス号など)の冬の風物詩ともなっている季語である。それに津軽の音を代表する津軽三昧が2句あった。

人の名前では、俳句の恩師である草田男が草田男忌を含めて11句、太宰が桜桃忌3句を含めて10句となり、千空の思い入れが伝わる。次いで(葛西)善蔵4句、(棟方)志功2句、(寺山)修司2句など郷土の文化人が詠まれている。

方言として私が理解できる津軽弁は約25語にも及ぶ。千空は普段の話し言葉はもちろん、講演での言葉もほとんど津軽弁交じりであったと聞く。俳句が津軽弁交じりであったとしても頷ける。

代表的な方言の例句には、めらし(乙女) 8句、めらはど(娘等) 1句、わらはど(童等) 3句、おど(お父) 2句、あば(阿母) 1句、藁むり(藁煙) 2句、あがべご(赤牛) 2句、がさ蝦(しゃこ) 2句、がしやしば(卵の花) 4句、どぐい(虎杖) 3句、あまつこ(甘酒) 1句、ひとかたげ(一片食) 1句などがあった。これらの方言交じりの俳句には、標準語の句では到底味わえない津軽独特の調べや懐かしさがある。

藁焼きの煙執念く北津軽

岩木嶺を拾げて明くる瑞穂かな

白神のいのちの清水はらわたに

風の声火の声ストープ列車発つ

目つぶしの雪降りしきる津軽三昧

あをもりにあをき沖あり草田男忌

太宰忌や雨に花咲く女傘

万緑や目屋人形はみな乙女

火祭の火に娘等も童等も

我もまた津軽のお父や暖炉汽車

あとがき

句集を読んでいると、千空俳句の一句一句にどこか親しみを感じる。それは何故なのか。そんな疑問を解き明かすために、俳句の基本に立ち返って分析してみたのが本稿である。季語の使い方、モチーフの選び方、言葉の並べ方などまだ解析すべき部分が沢山ある。千空俳句の深い森の中に迷い込んで、二進も三進もいなくなってしまうが、どこか明るい出口を探して更に進んでみたい。今回の分析にあたっては、俳人成田千空研究会の代表である青森文芸出版の佐々木達司氏に大変お世話になった。深く感謝したい。

参考図書

- 俳人成田千空研究会編『日本 成田千空句集』青森文芸出版 2019
- 齋藤美穂『成田千空伝』青森文芸出版 2019
- 矢本大雪編『千空歳時記』青森文芸出版 2002
- 藤田湘子『新版20週俳句入門』角川学芸出版 2010
- 皆川盤水『改訂新版すぐ役立つ俳句入門事典』東京新聞出版局 1994

(かまた びせいし／千空研究会会員／弘前市)

俳人 木村九折と成田千空

齋藤 美穂

はじめに

千空は戦後の五所川原に根を下ろし、この地の文芸活動の進展に大きな役割を果たしました。地域の文芸史を俯瞰した千空の位置づけを考えると、前代の様相を知る資料が必要となります。

北五地域で七十年近く続いた津軽鉄道株式会社(以下津鉄)の社内句会「水車吟社」の記録には、この地域の昭和初期の俳句活動を伝える貴重な記述が残されています。今回は、元会員の澁谷房子さん(現・津鉄社長付顧問)から提供していただいた資料をもとにした調査の一端をご紹介します。

謎の多い九折の生涯

津鉄社内に俳句の種を撒いたのは五所川原の俳人・木村九折(本名・万之蔵)でした。『句集水車』の詳述を参考にすると、九折は明治二十八年、五所川原町字蟬の羽(現在の新町)に生まれ、県立五所川原農学校を卒業。函館に渡り、警察官その他を転職したのち帰郷、煎餅屋を開業していたところ、先輩のすすめで創立間もない津鉄に入社しました。函館時代から俳句を学んでいたという九折は松葉吟社を結成、俳誌「山葵」を創刊しました。九折の俳句にかける情熱によって「山葵」は全国誌にまで発展します。

昭和五年、九折は津鉄全線開通と同時に芦野公園駅長として駅舎に在住、駅前の花壇造りや猿、小鳥などの動物園の飼育、管理一切を引き受け、以後十数年にわたって俳句の普及につとめました。臼田亞浪に師事した九折は「温和で親切な俳句の駅長さん」として沿線住民に親しまれ「芦野公園の豊かな自然環境で鉄道員と俳人という立場を生かして活躍しました。六年に津鉄開通一周年記念県下俳句大会、翌年に第一回芦野公園風景を課題とした県下俳句大会を開催していますが、特に七年の大会は応募者二三名、句数七〇〇余句を集め、主宰誌「山葵」の絶頂期を示すものとして注目されます。当時としてはたいへんな数字だと思われるが、九折のこうした活動は、青森県の主要な文学史料や新聞等に見つけることは出来ませんでした。十五年、太平洋戦争開戦が迫り国の統制力が強まるなか、『月刊東奥』二号に九折の作品「炭」十句が掲載されています。十九年、九折は津鉄を退職すると、周囲の説得も聞かず家族とともに満州へ移住し、翌年中華民国・吉林省の日本人宿舎で息を引き取ったというこ

とです。敗色濃厚となった時期に敢えて渡航を決意した九折。開戦前後の国策を背景にした鉄道輸



木村九折句碑「まろばんか登仙岬は郭公近し」
芦野公園駅構内に昭和55年4月25日建立

送の混乱や俳壇の沈滞ぶりなどが九折を追い詰めたのでしょうか。会誌「水車」には九折の人柄を偲ばせる寄稿が散見されます。

「想い出の木村九折」

野宮 素外

九折先生が、公園の駅長となった頃は、よく公園を散策し、句作の材料をあつめ、指導を受け(に)行ったものだ。気心のやさしい、にこやかな顔がいつまでも臉にうかんでくる。／やがて、世が変わり、人も変わり、九折先生が満州に渡ったと聞いたのは、しばらくあとであった。そして終戦によって失ったものは余りにも悲惨なものであった。遂に日本の土をふむ事はなかったと聞いた。／先生の心をいつまでも忘れずに努めたい。

(平成六年十一月二十二日 通巻四八〇号)

昭和八年にやむなく廃刊した「山葵」の後継が水車吟社でした。後に社長に就任した三和筆村をはじめ、九折に直接指導を受けた数名の社員の存在が推進力となり、小さな職場句会は着実に成果をあげていきました。彼らがガリ版刷りで始めた俳誌「水車」は六〇〇号を超え、記念句集『水車』四冊の刊行と合わせて特筆すべき記録となっています。九折に関する資料は五所川原の大火で焼失しており、これらは有力な資料となることでしょう。

千空と「水車吟社」

「木村九折の在所は旧五所川原町字蟬の羽だという。蟬の羽は現在の町で私と同じ町内である。だが、九折は満州に渡り亡くなってから私が新町の人となったので、全く出会いがない。九折とい

う人をだんだん知ってくるほどに残念に思う。」千空は『句集 水車』第二集の序文にこう記しました。また、昭和七年の大会のレベルを認めたと、九折は北五地方の土を耕し、新しい俳句の種を蒔いた人」だと記していますが、中央の俳壇との往来を重視した青森県の近代俳句研究の文脈から外されていることは残念なことです。

千空は昭和四十六年から平成十六年までの長きにわたり毎月の会誌「水車」で特別選者を務めたほか、大会や社外句会で会員らと交流を深めました。俳句に情熱を傾けた先人の存在を知り、そこに学ぶ市井の人々の句業を見守り続けた行為も俳人・成田千空の一面として忘れてはならないでしょう。

昭和初期の五所川原

津鉄入社後に九折と出会った泉無味(本名・潤太郎/書家)によると、五所川原では九折をはじめ周辺地域のそうそうたる俳人の集まりが開かれていたといいます。近い頃の資料では、昭和四年八月「山葵」第十三号・一周年記念号の出句者として、田中美穂、新井菊汀、中津逝水、中道雅仙、泉無味、中道剣星、渋谷芳水、岡田晴秋、平井鉄華、野呂青耕、一戸木人、山中天小人、小林柳之、土岐石人、青山荻邨とあり、青森の結社にも籍を置いた津鉄沿線地域の指導者らが名を連ねていることがわかります。

千空は二十五年に五所川原へ移住すると、五所川原俳句会の設立と平行して五能沿線俳句懇話会を結成し、地域の俳句会を盛り上げようと奔走しました。これらの活動に参集した俳人や北五地域の俳句運動の形成を詳しく調べれば、九折から戦

後の千空へと引き継がれた地域の俳句活動が地続きであることが明らかになると考えています。

最後に

研究会の発足の構想を伝えられた時から五年になろうとしています。私の一番の関心は地元・五所川原を中心に千空の足跡を探ることにあります。ささやかな研究の断片が結びつき、俳人の生

千空先生に俳句を習う⑦

千空さんが遺したもの

世 良 啓

2003年1月から、朝日新聞青森版「おもしろひと山脈」に成田千空ロングインタビューが掲載された。連載を記念して講演会も実施された。



朝日新聞青森版 2003年1月18日付

き方や作品世界を知る手がかりを得る喜び。私の中で千空の魅力は衰えることなく、研究のおもしろさを感じています。

これまでご支援をいただいた皆さまに、この場をお借りして感謝を申し上げます。今後とも関心を寄せられる皆さまとともに歩んでいくことを楽しみにしております。

(千空研究会調査研究員/五所川原市)

演題は「わたしと俳句」、2月22日(土) 2時~3時30分、場所は朝日新聞青森支局、定員40名だ。

講演はまず太宰の話で始まった。太宰文学と芭蕉の近さに触れ、「津軽」が「奥の細道」を徹底して読んで書かれていること、「古池や蛙飛び込む水の音」の句についてなど、芭蕉から子規、現代に続く俳句史を説明された。

一方、父は南津軽郡の浪岡の人、母は北津軽郡の飯詰の人で、春夏秋冬、季節がはっきりした津軽で季節の行事をきちんと体験し、歳時記の中で育ったことが自分の俳句の素地となった、と自分史を絡めつつ、師である中村草田男の人間探求派について語った。

昭和10年代、斎藤茂吉が「人間の生をうつすのが写生、人間の声としての歌」という短歌を生み、俳句にも影響を与えた。花鳥諷詠だけでなく、どう生きているか、どう生きたいか、人間の生活をうたうことを俳句に持ち込んだのが草田男だという。

だが、いま衣食満ち足り、どう生きるかという問いのない趣味の俳句が隆盛で、人間探求派はまったく流行らなくなった、と嘆かれた。

こんな無制約の時代には、自由に発想しながら

も、生きる実感をどう定型に生かすのかという課題が生まれる。だが俳句界は多様化、高齢化が進み、俳句で苦しむのは馬鹿らしいという風潮がある。おもしろく楽しむことが悪いわけではないが、文学や芸術という厳しい世界からは遠くなる。世の中には左にも右にも正しさがあり、矛盾する力

【作品鑑賞を読む】⑧

秋ふかき酒の肴に蛸の疣

七年前、津軽に転居したとき、知り合いは誰も居なかった。ただ一人成田千空の名前だけは知っていたので、千空さんの出版祝賀会でおめにかかれたときは嬉しかった。「なぜ津軽に引越してきたのですか」とお尋ねになるので、「とにかく辺境の地に住みたくて」と答えると、「桃子さん、ここは辺境も辺境、昔から流された者と逃げてきた者の地なのです。ここから先はもう逃げる所が無いのです」とおっしゃった。この言葉は胸に刺さった。

千空さんは、これ以上逃げる所の無いこの地の、ぎりぎりの自然と人間を俳句にしつづけている。雪国の雪、雪に埋もれた生家、百一歳まで生きた母、鵠、友ら、林檎、ねぶた、やませ、揚げたい句はいくらでもあり、どの句もみな懐かしい。掲句は一読、芭蕉の「隣りはなにをする人ぞ」を思わせる。隣りの人を懐かしみつつ酌めば、つまみは吸盤のごろっとした蛸ぶつだ。蛸の疣だなんて、素朴で鄙びていてなんて旨そうなこと。そして酔うにつれ滑稽でもの哀しくもなってくる。

辻 桃子

『俳句』平成19年7月号

オスの中で、自分の言いたいことは何かを厳しく問わねばならない。中庸ではだめ。うつくしいもの、みにくいものはなにかを見極めるセンスが大事故だ。感性の解放が俳句の解放になる……。

当時の講演メモから記憶を呼び起こすと、千空さんの言葉は今の自分に突き刺さる。

さて職場復帰の後、私はしばらく投句を続けた。

8月19日の句会の結果が封書で送られてきた。開くと、鉛筆で全員の句を書き、赤ペンで印をつけた千空さん直筆の選句プリントが一枚入っていた。

その後9月2日と17日の句会で一句ずつ千空さんに○をいただいた。うれしかった。でもそこまですだった。育児と仕事で手一杯、俳句をつくる心の余裕を失った。子供が大きくなって落ち着いたらまたやろうと、一年通った俳句教室へのお礼の手紙を書き、別れの挨拶に伺った。

千空さんはお返事をくださった。9月17日の消印。「俳句を続けて欲しいと思います。「萬緑」へ投句してみるのも一つの方法と思います。」との走り書き、どんなに嬉しかったか。

けれど、情けないことに私は一度も「萬緑」に投句できなかった。

2007年11月17日、千空さんの訃報のあと、次々に追悼記事を読んだ。東奥日報紙上で11月24日、藤田枕流氏が「不世出の俳句作家」とその死を悼み、福士光生氏は11月から12月まで三回にわたり千空さんの業績を振り返った。「昭和の秀句1000句」に青森県からただ一句収められているのが「大粒の……」で、師草田男の詩性と思想性を継承した千空俳句は、昨日を越えた我を創造

しようという「常に途上」の俳句なのだという。翌年6月30日の同紙で八戸の俳人、木附沢麦青氏は「太宰治の「津軽」ほどではないにしても、俳句界における「津軽」を代表する作家は成田千空氏をおいては考えられない」と述べた。

千空さんは破格の俳人、いつか教科書に載るよ、風土俳句をはじめた人だからね、と、教えてくださったのは泉嶺さんだった。小説を書くジャーナリスト、知の巨人という印象だったが、千空さんから、いま県内で油の乗ったいい句をつくるのは「此岸」の泉風信子、と聞き、それをご本人に伝えると「いやあ、それは千空さん、お世辞だな……」と照れながら少年のような笑顔をみせた。

千空さん亡き後、「津軽」を引き受け、県俳句界をまとめたのはこの泉嶺（風信子）さんだった。去年15年ぶりに私は俳句を再開したのだが、それを一番喜んでくださったのも……。

その泉さんの訃報をこの10月1日、突然聞いた。ご自宅にお悔やみに行くと、屏風のかわりに壁一面の書棚。本に囲まれた棺の中で泉さんは微笑んで眠っておられた。

9月28日、県現代俳句協会会長として秋田に仕事に行き、疲れたと言って休み、夜半に一度目を覚まし、まだ起きていた娘さんに、あまり無理するなよと声をかけて寝室に戻り、眠ったまま静かに旅立たれたという。

今頃は、泉さんが千空さんに弘前高校が俳句甲子園で全国優勝したことを報告し、寺山修司や「暖鳥」の人たちと祝盃あげながら彼岸句会をしてるに違いない。若い人らが俳句をつくる限り、きっと俳句は死なない、何度でも蘇る、と、きくと笑って。

大きな背中を見送りながら、せめて私も俳句を続けようと思う。

私たちは、やはり祖先のかなしい血に、出来るだけ見事な花を咲かせるように努力するより他に仕方がないようだ。——これは太宰治の『津軽』のなかの一節である。私もまた、けつきよく、俳句のなかにそれを求めて来たといえるように思う。

(成田千空『地霊』の後記)

(文筆家・高校教師／藤崎町)

宮川翠雨と暖鳥俳句(下)

西谷 ともえ

宮川翠雨と俳句を語る時に、青森高校教員時代を語らずにはいられない。

翠雨が昭和20年1月に青森高校の前身の一つである県立青森高等女学校に赴任して吹田孤蓬と出会ったと前号に述べた。女学校で同僚であったのだろうと思っていたが現存する旧職員名簿(青森高校創立百年記念卒業生名簿付旧職員名簿)に名前が見当たらない。吹田孤蓬は青森県近代文学館の検索装置によると「昭和22年からは青森市立第一中学校、23年からは青森市第一高等学校に勤務、昭和43年に退職するまで教職にあ」ったという。青森市立第一中学校、青森市第一高等学校とともに県立青森北高等学校の前身で、昭和23年学制改革によって新制高校へ変更となったものである。さて

翠雨と一緒にになったとすれば昭和20年から21年の一年間ということになるが、戦後の混乱にあったためか、また、実際に青森高等女学校に勤務していなかった為か、記録に残っていない。「昭和二十一年一月二十八日、郷里の女学校に赴任してきた。ここで吹田孤蓬とめぐりあう」(『俳句と私』『翠雨雑記』という記述の誤りであろうか。翠雨と孤蓬の出会いには、「暖鳥」刊行への第一歩でもある。今後調査を続ける。なお、翠雨は前出の旧職員名簿によると昭和20年から48年まで青森高校勤務となっている。昭和二十年度と二十一年度の青森県立高等女学校の成績一覧表が現存する。各学級ごとに全生徒の全科目の成績が学期ごとに一覧になったものの綴りで、担任の署名押印、教務担当教員の印、校長の印が押されている。そこから翠雨・宮川武弘先生は昭和二十年度には二年一組の、翌年は三年一組の担任をしたことがわかる。それぞれ一学期から学年末の3枚ずつ綴られている。『青森空襲の記録』などによると青高女は全焼だったらしいから、翠雨が着任した後に残っていなかった昭和二十年の一学期、二学期の分を作成したのだろう、成績表はあったにしてもあまり当てにはならない。当時青高女も学校工場になっており、6月からは宮田、荒川、新城の各国民学校に疎開していたようで、授業どころではなかったからである。

昭和20年9月から造道国民学校で青高女は授業を再開、翌年6月には第五連隊敷地(現青森高校)に移転。やっと教員一人に一つの机が与えられるようになったという(『青森高校百年史』より)。書や俳句どころではなかっただろう毎日が思われる。が、そんな中で吹田家では夜な夜な句会を開いて

【千空点描】

病床吟

若いころは大病続きだった千空さんも、80代になってからは調子がよかったようで、『萬緑』や『讀賣俳句』の選、俳句教室などで大活躍だった。

「このごろ、なんだか死なないうような気がしているんだよ」と言っ、みんなを笑わせていた。

2003年、肺炎で入院した。幸い快復し、「いいもんだよ。寝ていても俳句ができるんだ。二〇〇句作ったよ」というので、『文芸あおもり』に「蘇生——入院前後一五四句——」を一挙掲載した。

2007年3月、第6集『十方吟』を出版、7月の県文芸協会総会では、癌に侵されていることを公表、最後までがんばりたいと述べた。

最後の病院では、「もう逝きたくないよ」と弱音を吐いた。それでも執念で亡くなるまで作句を続けた。

寒夕焼に焼き滅ぼさん癌の身は

この辞世句は亡くなってから『俳句』1月号に「個室」(8句)として掲載された。(佐)

おり、翠雨も参加していた。終戦後も早期から集まっていた。だからこそ昭和21年に「暖鳥」が創刊できたのである。

青高女は昭和22年、火事で全焼し、生徒は一時市立野脇中学校(現市民センター)、私立山田高等家政女学校、浪打小学校に分かれて授業することとなり、その後浪打校舎を竣工し移転した。翌23年には学制に順って青森女子高等学校と改称になったが、25年4月、突如女子校は青森高校に統合となる。進駐軍の男女共修の求めに応じたものだという。新校舎も八割ほど完成していた。このころ翠雨は時間割研究委員会のメンバーだったことが『青森高校百年史』に記されており、統合まで女子校の教員だったことがわかる。統合したものの校舎は浪打のまま。当時「青中月報」から移行し、刊行されていた「青高新聞」では近く筒井校舎にやってくる旧女子校生徒の通う浪打校舎を北校と呼んで毎号紹介している。翠雨は第11号(25年9月刊)には教員随想コーナーに「善意」という題の文を寄せている。善意を伝えずにさりげなく相手を気遣う行為を善意だとして、ある夫婦の例を出している。配給の芋を洗う夫が、来客時に手を拭いて芋を洗っていたことを客に知られないようにした。妻は夫に「やはり芋を洗っているところを見られるのは恥かしいのですか」と聞く。夫は「私が芋を洗っていることによつて君が他人に云々されるのが辛いのだ」という。そこで妻は夫の善意を知り、この人と一生充実した人生を過ごせると思うという例である。高校生の新聞に夫婦愛かと驚かされたが、それも翠雨のユーモアであらう。他号の他の教員の教訓めいた文章とは余りに違う。

翌26年4月校舎も一つにして、新しい青森高校が発足したその年、寺山修司が入学する。そこの翠雨との出会いはまさに運命と言っても良い。

寺山が所属した文学部の顧問が翠雨だった。東奥日報の俳句欄(俳誌「暖鳥」だったとも)に京武の俳句が掲載されたことを契機に、寺山は俳句に熱中する。「暖鳥」の句会にも参加するようになり、また、投句もするようになった。寺山は新聞部にも所属し、校内を飛び回っていたと同期生たちは言う。10月発行の「青高新聞」18号には、文学部が文化祭で校内俳句大会を企画し、松濤社の高松玉麗ら数名を選者として招聘。暖鳥社代表として翠雨も選者として参加した記録がある。また「秋深し」と題した五句が翠雨の句として掲載されている。12月発行の19号には「やまびこ俳句会」結成の記事が載る。文化祭での俳句大会がきっかけとなったこと、また、「宮川翠雨先生のもとに最近県俳壇からも注目されている寺山、京武君」ら三十名が集まったために結成されたとある。この記事自体、寺山が書いた可能性が高く、滑稽ではあるが、翠雨の名を書かずにいらなかった寺山の気持ちが見える。翌年の文化祭は「県下高校生俳句大会」を開催。弘前高校「かたくり会」(代表新谷ひろし)や黒石高校とも交流を深めていたようだ。翠雨は他の暖鳥メンバーとともに選者として活躍していた。県の高校生俳壇にも欠かせない人物でもあったのである。

当時千空さんは寺山も投句していた「萬緑」誌に掲載句が増え、昭和28年、第一回萬緑賞を受賞するに至るが、寺山がそれに衝撃を受けたことはすでに述べたところである。県下高校生俳句大会を開催するにあたって千空さんは寺山にハガキを書いた。「ありきたりの大人の句会の真似だけにするな」。昭和27年開催の大会ではなかなか思うようにいかなかったことが、「暖鳥」(昭和27年10月

号)に「千空さんのハガキにはまことに申し訳がない」という言葉からわかるが、後に寺山が、県下の高校生の結社を作ろうとした動きや、昭和29年の全国高校生文藝コンクールの開催への動きに影響したに違いない。寺山修司の超高校生級の活躍は、翠雨が書だけでなく俳句にも情熱を注ぎ、また、「暖鳥」に導いたことで多くの出会いにつながったことに起因すると言っても過言ではない。

(県立青森高校教諭・元県近代文学館副室長／青森市)

【備忘録】

『俳句研究』2006年12月号

「俳人大アンケート」

- ①自薦1句 ②今年のベスト3句 ③注目する俳人2名 ④句集ベスト1冊 ⑤作句上の課題、関心事

成田千空 大正10年生まれ〈萬緑〉

- ①次郎の笛太郎の佞武多太鼓かな

- ②遠くにも枯野がありて大枯野

流さるるくらゐは跳んであめんぼう

雪がふるおのが重さを舞ひながら

- ③高野ムツオ・坊城俊樹

- ④高橋睦郎『遊行』(星谷書屋)

- ⑤青森ねぶた祭は長い冬の季節を越えたエネルギーの発散の祭といわれている。笛太鼓は子供の頃からこまれる。「太郎を眠らせ太郎の屋根に雪ふりつむ」という太郎と次郎は、今やねぶた祭の力となっている。

成田千空資料再録 ⑨

『俳句』平成10年7月号

「特別寄稿」太宰治と私

太宰治と俳句について

成田 千空

(萬緑)

二十代の頃、太宰文学に魅せられてよく読んだ。大戦争中に病気で臥て、鬱々と暮している若い身には、読んで心が癒される小説が多かった。短篇、中篇に忘れたい作品が多い。『思ひ出』『ロマネ

スク』『満願』『富嶽百景』『魚服記』『雀こ』『桜桃』『走れメロス』『清貧譚』『トカトントン』『お伽草子』等、枚挙に遑が無い。長篇では『右大臣実朝』『新ハムレット』『新釈諸国噺』『津軽』が楽しく、『人間失格』『斜陽』は苦しかった。芸術は民衆に良い音色を送ればよいのであって、生活の内幕を見せる必要はない」という意味のことを言っていたが、魂の告白を文学の究極としていた作家にちがいない。一方、芸術の美は所詮、市民への奉仕の美」とかへおれはどうせ小味な男」とまで言っている。意思と感情の振幅が大きく、発明発見をおこたらない新しさと、伝統の不易性を見さだめる眼があった。パロディのおもしろさやユーモアの源泉もそこにあった。しかも文学に生命をかけていた人だから注目せざるを得ないのである。

私が太宰文学を読みはじめた時期と、俳句をは

じめた時期が重なっており、私の俳句にも太宰文学の影響があると思われる。太宰治と中村草田男を、私の志向の目標として自覚したのは戦後である。小説や俳句のジャンルを越えた文学として感じ、今もその延長線上にある。草田男と一緒に津軽の旅をしたとき、十和田の山中で、私の内なる太宰と草田男について、一言だけ告げたのも文学のことであった。草田男の眼が俄かに輝いたのを覚えていた。私と同世代には意外に太宰嫌いの人が多く、後続世代になるほど熱狂的な人が多くなっている不思議な作家である。草田男は太宰嫌いと思われるが、太宰が女性と入水した翌年、三鷹の禅林寺に太宰治の墓を訪ねて、句を成している。

春の愚者奇妙な賢者の墓を訪ふ 草田男

南京豆墓前に噛み噛み未成年

〈奇妙な賢者〉という一語が、草田男の太宰観にほかならない。昭和二十五年に私がはじめて草田男を訪ねたとき(研究会註・正しくは昭和24年11月1日)、当時住んでおられた吉祥寺から三鷹の禅林寺までの道順をていねいに教えて下さって、その通りに行ったら女子大の前に出て、墓参を断念したことがあった。

太宰治は俳句に、というよりも芭蕉に関心をもっていたことは、彼の作品の随所に感じられるが、句作を試みたのは昭和六年(二十三歳)の頃だけである。年譜に依ると、

昭和六年(一九三一)、二月、上京した小山初代と同棲し、品川区五反田一丁目に住む。夏、神田同朋町に、晩秋、神田和泉町に移る。東大反帝国主義学生連盟に加わり、左翼非法運動を積極的に続けるかたわら、朱麟堂と号して俳句に凝る。

登校は全く怠った。この年九月、満州事変起る。

この当時ことを彼は、『東京八景』でこう書いている。「五反田は、阿呆の時代である。——学校へもほとんど出なかった。のほん顔で日を眺め暮していた。——ずるずるとまた、れいの仕事の手伝いなどを、はじめていた。けれども、こんどは、なんの情熱も無かった。遊民の虚無。それが、東京の一隅にはじめて家を持った時の、私の姿だ。——朱麟堂と号して俳句に凝ったりしていた。老人である」。彼の生涯で最も駄目な時代であろう。当時、読んでげんなりしたことを覚えていた。この包みかくさない内幕は、翌年、共產主義の運動の放棄と、警察への自首となったが、遺書のつもりで一篇の小説を書いた。それが秀作『思ひ出』である。「幼児からの悪を、飾らずに書いて置きたいと思ったのである。——私は、再び死ぬつもりでいた」。実際はかなしさと可笑しさの入りまじった告白体の、新鮮な感性の切り口を見せている。

俳句の方は、朱雷と号する従兄弟との両吟の俳諧で、ニヒルな時代の言葉遊びに凝ったようである。だが、両吟のかたちで全集には集録されていない。凝ったというからには、相当の句数があったと想像されるが、全集には太宰治の「俳句」として十句集録されている。

幫間の道化褰れやみづつばな
爪を切つてゐながらも苦ぬるむ水
追憶のぜひなきわれ春の鳥
宗匠の不惑まどひけり竹を植う
ひとりゐて螢こいこいすなつばら
病む妻やとゞこほる雲鬼すゝき
旅人よゆく野ざらし知るやいざ

こがらしや眉寒き身の俳三昧
今朝は初雪あゝ誰もゐないのだ
亀の子われに問へ春近きや

これにあとがきめいた述懐が添えられている。
「朱蕾われに感想とか云ひし／華やかめきたるこ
とを強う／酷ならずや／酒の気も手傳ひて／即ち
たはむれに／老いそめし身の紅かねや今朝の寒／
朱麟」とある。どうやらわが俳句として自ら選ん
だ十句と思われる。生涯に十句あればよし、とい
うのが彼の俳句観であつたようだ。あきらかに机
上の俳句であり戯作と見られる。彼が敬慕した芥
川龍之介の文人俳句には及ばないと思うが、「ひ
とりゐて」「旅人よ」「こがらしや」「今朝は初
雪」など孤独のつぶやきが聞こえる。又、

外はみぞれ、何を笑ふやレニン像
という句も、モノローグ風の小説『葉』の中に、
ぽつりと出ている。

昭和十七年に、「天狗」という題名の、「猿蓑」
についての随想を書いている。

「暑い時に、ふと思ひ出すのは猿蓑の中にある
〈夏の月〉である。

市中は物のにほひや夏の月 凡兆
いい句である。感覚の表現が正確である。私は
漁師まちを思ひ出す。人によつては、——さまざ
まであろうが、何を思ひ浮かべたつてよい。自分
の過去の或る夏の一夜が、ありありとよみがへつ
て来るから不思議である。（中略）芭蕉がそれに
つづけて、

あつしあつしと門々の聲
所謂、つき過ぎである。前句の説明に墮してゐ
て、くどい。蛇足的な説明である。（中略）それに
つづけて、

二番草取りも果さず穂に出て

去来だ。苦笑を禁じ得ない。さぞや苦勞して作
り出した句であらう。去来は真面目な人である。
野暮な人は、とかく、しやれた事をしてみたがる
ものである」

といったふうに延々とからかった挙句に、「夏
の暑さに気がふれて、筆者は天狗になつてゐるの
だ。ゆるし給へ」と結んでいる。小説家らしい連
句への関心と、名にとらわれない読み方が躍如と
しておもしろい。

『津軽』の中で、「古池や蛙飛び込む水の音」に
ついて書いている所があつて、昔、大いに惹かれ
た覚えがある。かつて義絶された生家へ帰つて、
庭を歩く。

「二木一草も變つてゐない感じであつた。——池
のほとりに立つてゐたら、チャボリと小さな音が
した。見ると、蛙が飛び込んだのである。つまら
ない、あさはかな音である。とたんに私は、あの、
芭蕉翁の古池の句を理解できた。（中略）余韻も何
も無い。ただのチャボリだ。世の中のほんの片隅
の、実にまづしい音なのだ。芭蕉はそれを聞き、
わが身につまされるものがあつたのだ。——さう
思つてこの句を見直すと、わるくない。いい句だ。
当時の檀林派のにやけたマンネリズムを見事に蹴
飛ばしてゐる」

太宰治は俳句を読むすぐれたセンスを持ってい
た人だと思う。彼が生まれた金木は北津軽のほぼ
中央に位する古い町で、昔から俳諧が盛んであり、
寺院などに俳諧の古い奉納額が残っている。文の
血脈が流れており、そして反骨の人が多いよう
である。

太宰治を詠んだ千空句

秋時雨のこりて修治・たけの像
秋夕日たけは津軽の母なりき

アスパラ茂りえにし薄るる桜桃忌

海燕ただ荒岩の碑なりけり（蟹田・太宰治碑）

桜桃忌老いておめおめ座りをり

桜桃忌寝起に己が白枕

桜桃忌毀誉褒貶のおもしろき

桜桃忌暮れじと暮るる波がしら

館名「斜陽」汗とざらつく頬の塵

草あれば水あれば鳴き残る虫（金木太宰治碑）

黄落のいま恍惚と太宰の碑

朱夏いまも太宰の宿に丸ポスト（ふかうら文学館）

焼酎の強さは甘さ太宰の忌

生誕祭さくらんぼうの百の艶（太宰治生誕祭）

太宰忌はまた生誕日含羞草

太宰忌や雨に花咲く女傘

梅雨寒きうつせみの身の黒二重廻（太宰治資料館）

泥ぐるみ萌ゆる流域太宰故地

汝が家郷青山椽の花咲くに（太宰治よ）

存へて草むすばかり桜桃忌

夏風樹笑みて訪ふべき門ならず

夏風樹夙に生家は失せし

花屑の轍の行方太宰故地

塀伝ふ揚羽太宰はこの家の子

満ち潮に逆流る河桜桃忌

*句集・雑誌のほか、句帖からも拾いました。

わたしと「俳句研究」

昭和俳句の命題

成田 千空
(萬緑)

私が俳句をはじめたのは、昭和十六年の秋で、改造社の「俳句研究」を先ず購買した。最初に読んだのは十月号で、中村草田男の特別作品に注目した。俳句の何たるかを知らぬままに、人間くさい表現に魅かれた覚えがある。草田男の詩的な句に難しさを感じながら、繰り返し繰り返し読み、ときおり朱筆で添削を加えながら読んだ。草田男という名の読み方もわからない、津軽の青年が、ずいぶん生意気な読み方をしたものである。「青露変」という題名で(青露とは、川端茅舎の戒名青露院から採る)、「七月十七日、茅舎長逝の報いたる」[同十九日、其の告別式]「旬日後、彼を偲び、己が芸の為すなきを歎きつゝ、近郊を歩む」などといった前書がところどころに置かれて三十句。草田男という俳人の友情の深さを感じた。初めの五句は茅舎の逝去と直接関係がないようだが、何か切迫した感じの句で、茅舎の末期をすでに知っていたのかもしれない。

汝等老いたり虹に頭上げぬ山羊なるか
人ひとり簾の動き見てなぐさまんや

あとで知ったことだが、この時代の草田男は、新興俳句が特高警察によって弾圧されたあとで、伝統をおびやかす俳句のつくり手としてマークされ、情報局あたりから圧迫されていたといわれて

いる。「汝等老いたり」はそれに対するレジスタンス的な句であるが、心友である茅舎の病もふかく、孤独の座に居直った詩人の気迫が感じられる。汝等とは俳句の革新を圧迫する汝等にちがいない。梅雨も人も葬りの寺もたゞよすが

青稲の碧羅の空も茅舎以後

十月号にはまた、「作品の危機」と題する松本たかしの評論が載っていて注目した。山口誓子の句集『黄旗』を批判した文章で、和歌的な詠嘆に傾いてゆく、当時の誓子の作風に、俳句の危機を見てとった痛烈な評論であった。同じ「ホトギス」の俊才であり、虚子から「辺境に鈴を進むる征虜大將軍」といわれた先輩誓子の、書きおろし句集『黄旗』への論難のはげしさにおどろいた。俳句のきびしさに惹かれてゆく動機ともなった、忘れたがたい評論である。これから草田男と茅舎とたかしを学ぼうと思った。

草田男を学んでゆくうちに、「人間探求派」のことを知った。昭和十四年八月号の「俳句研究」に、「新しい俳句の課題」という座談会記事が載っている。出席者は石田波郷・中村草田男・加藤楸邨・篠原梵で、司会者は山本健吉という錚々たる顔ぶれであるが、発言の多いのは草田男と楸邨であった。

加藤「俳壇の大勢が一種の飽和状態に達している。一面完成に近づいている。そういう方向では言えなかった〈生活からの声〉が盛り上がるようにしている」。

中村「創作に際しての我々の要求、及び自己の内容は他の文芸の創作の場合と共通である」。

加藤「俳句というものを趣味として考えると、それ自体で完成されているような世界、そういう

ものを要求しているのじゃないと思うのです」。

中村「完成というよりただ痛切に時代の子どもとしての自分に一致するかということが大切なのではないかと思うのです」。

そこで、司会者の山本健吉が「貴方がたの試みは結局人間の探求ということになりますね」という、昭和俳壇史上の命題が生まれたのである。

俳句を文学として考える今後の課題でもあらう。

千空 白鳥の句

【あ行】

青々と子午線の空白鳥来る
天翔ける玉の緒さやに帰白鳥
緯度高く白き矢となるスワンかな

海昏るる白鳥千の燭立てて
海に白鳥津軽言葉にある訛

海は春白鳥飛んで大回り
枝川の白鳥四五羽凍らずや

大白鳥帰り鴉の村となる

大白鳥白刃のごと羽撃ちあふ

大白鳥鳥船となり天翔ける

大白鳥風に逆らふ向きに鳴く

大白鳥波あるもよし和むもよし

大白鳥波又波をゆりあやし

大白鳥風に逆らふ向きに鳴く

大白鳥波又波をゆりあやし

沖呀ゆる刻白鳥こそ数ふべし

【か行】

帰らなむ白鳥の辺に水廻る
帰らむか白鳥百羽袖触れあふ
風立ちぬ白鳥百花繚乱と
飼はれるて瘤白鳥の梅雨の瘤
君在らぬ村白鳥をまぼろしに

【さ行】

郷寧し飛ぶ白鳥の白十字
さざれ石鳴るや白鳥の別れ近し
白砂も黒砂も綺羅白鳥翔つ
しら鳥の白羽をこぼす氷かな
白無垢の白鳥とるて無為の時
水天一視白鳥の羽張りわたる
雪後にて天翔る腋鮮しや

【た行】

発たんか白鳥翼に黒き羽はしる
津軽の東白鳥海に啼く日あり
遠々し浮寝白鳥繭のごと

【な行】

波なりに冬去る白鳥の墓一基
残る白鳥海に風吹き砂を吹く

【は行】

白日の白鳥突如ひびき翔つ
白鳥千羽東にひらく海と空
白鳥来るや群立つ波の呼び応へ
白鳥返る海に空瓶漂ひるて
白鳥群鴨の小廻り忙しなや
白鳥群仔は薄墨の羽搏てり
白鳥湖松は緑を尽くしけり
白鳥五羽仰ぎ見て亡き友のかず
白鳥育つ雪の踏み跡葉模様
白鳥に餌を撒きこころ浮くごとし
白鳥に風雪迫る鮮しや

白鳥に雪の天網静かなり

白鳥の歩きて雪を汚しけり

白鳥の飢ゑのうら声風のことゑ

白鳥の浮き身は揺れ身日もすがら

白鳥の憂きや水面に羽ひらく

白鳥の海ゆ肩寄せ相ひ戻る

白鳥の彼方人煙ゆるやかに

白鳥の光の白波しぶくなり

白鳥の影も白鳥城の園

白鳥の消入りし雲の白漂ふ

白鳥の来るや群立つ波の呼び応へ

白鳥の去就濁波絶え間なし

白鳥のキャンドルの頸総立ちに

白鳥の杳漆黒に雪の上

白鳥の黒豆粒の瞳を憐れむ

白鳥の黒の蹠水面に張る

白鳥の声かすめ去る夢の端

白鳥の仔は薄墨の羽搏てり

白鳥の声かすめ去る夢の端

白鳥の白波と立つ声こぞる

白鳥の白の濃淡逆波に

白鳥の白に風立つ恋の舞

白鳥の雌雄は知らず日廻し

白鳥の精霊めく白夜を帰る

白鳥の立ち羽ばたける大水輪

白鳥のたましひの白遠ざかる

白鳥のつかの間猛り羽光る

白鳥の何翼ふ羽荒々し

白鳥の花の身又の日はありや

白鳥の羽うすぐもる寒さかな

白鳥の遙かな一羽又なるか
白鳥の日々や紅さす川やなぎ

白鳥の豊満の羽根桃割れに

白鳥の水尾も水輪も母の川

白鳥の雪より白き見張りづめ

白鳥の雪に天網静かなり

白鳥の別れのこゑを臥て聞くか

白鳥は海ゆ肩寄せ相ひ戻る

白鳥や白州にのこる潟のゆめ

白鳥や世継ぎの御子はおくるみに

白鳥や光陰波と絶え間なし

白鳥や干潟つらぬく水ひとすぢ

白鳥を見あきて真鴨美しや

嘴太鴉みち白鳥に遠ざかる

初空やとぶ白鳥の白十字

遥かなる山見え白鳥飛来の日

久方の日と女人あり白鳥見に

日の昇るときを平らに帰白鳥

風樹の嘆白鳥の声きれぎれに

北帰まさに白鳥の声徹るなり

【ま行】

水涸れて舞ふ白鳥は紙のやう

胸もとに凍りみ寄る波の白鳥視よ

水浪々白鳥を日の見離さず

道の辺に薄くスワンの渚あり

都鳥きびきび白鳥のろのろと

群るる波白鳥の頭秀でたり

【や行】

雪沈着く六界の一白鳥湖

夜の白むはじめの幽さ白鳥湖

呼べば寄る子づれ白鳥雪のなか

【わ行】

渡り來し白鳥海の波叩き

『千空研究』総目次

第1号

発会にあたって	佐々木達司	1
成田千空略歴		1
青森県近代文学館 企画展		
「成田千空」を振り返って	齋藤美穂	2
〈回想の成田千空〉		
大いなる魂	佐々木あさ子	4
生命の俳人	上條勝芳	4
千空忌	清水雪江	5
千空さんと初めて会った頃の私	櫻庭利弘	6
千空先生への感謝	高橋睦子	7
行合岬に句碑建立	草野力丸	7
思い出・断片	藤田健次	9
〈千空点描〉ダンチョウウさん		9
〈成田千空著作目録〉①		
句集・単行本／『文芸あおもり』		10
〈成田千空資料再録〉①		
句集『もがり笛』後記／合同句集『風祭』	10／11	
北極星		12
第2号		
千空さんの書斎		1
千空さんとの出会い・津軽詩話会のこと		
― 佐々木榮造さんに聞く―		2
〈回想の成田千空〉		
思い出すまに……	木村武彦	3
千空さんの言葉「バガになれへ」	浅利康衛	4
絵画のあり方を学ぶ	田中和弘	5
歳時記に採られた千空句①『合本俳句歳時記』		4
〈千空点描〉自転車		5

〈戦後俳句作家シリーズ〉

『成田千空集』解説

徳才子青良

6

〈作品鑑賞を読む〉①妻の眉目春の竈は火を得たり

7

父・米田一穂と千空 青森萬緑会通信句会誌

7

『未来』を中心として(1)

米田省三

8

千空俳句の礎(1)

西谷ともえ

9

永住の地五所川原 成田千空をめぐる人々(1)

齋藤美穂

10

忘れがたき五所川原人増田木巨子

齋藤美穂

13

〈成田千空資料再録〉②

青森工業学校校友会新聞『青工』、『寂光』、『月刊東奥』

16

寄贈感謝・会員名簿・北極星

16

第3号

五所川原の千空句碑	小池淳一	1
成田千空における風土と民俗		2
〈千空点描〉千空さんの帽子		2
〈回想の成田千空〉		
貴重な千空さんの「言葉」	阿保子星	3
寒 夕 焼	佐々木とみ子	4
思 い 出	櫛引麗子	5

歳時記に採られた千空句②

『北海道東北ふるさと大歳時記』

6

父・米田一穂と千空 青森萬緑会通信句会誌

米田省三

7

『未来』を中心として(2)

西谷ともえ

8

千空俳句の礎(2)

西谷ともえ

9

永住の地五所川原 成田千空をめぐる人々(2)

齋藤美穂

12

〈成田千空資料再録〉③

『月刊東奥』、『合同句集』、『海流』、『現代俳句集』Ⅱ、『現代俳句全集』第四卷、『合同句集』、『氷塔』、『修羅おとし』

16

千空資料を当研究会に寄託

寄贈感謝・会員名簿・北極星

16

第4号

千空さんの筆文字		1
中村弓子さんからのお手紙		2
〈千空点描〉鉛筆と消しゴム		2
〈回想の成田千空〉		
草田男句の二重性	泉 風信子	3
三ヶ月の師	世良 啓	4
歳時記に採られた千空句③		4
世界自然遺産白神山地『俳句歳時記』		
父・米田一穂と千空 青森萬緑会通信句会誌	米田省三	6
『未来』を中心として(3)		
中村草田男来青同行記の記録から	西谷ともえ	7
「中村草田男選 雑詠句稿」千空俳句とその周辺		8
永住の地五所川原 成田千空をめぐる人々(3)	齋藤美穂	9
方言詩人木村助男と成田千空		10
千空の師 中村草田男		
〈作品鑑賞を読む〉		
②春なれや人来て岩の秀に出づる	大岡 信	5
③大粒の雨降る青田母の故郷	中村草田男	11
〈成田千空資料再録〉④		12
『暖鳥』俳句・表徴・人間／西東三鬼論／圓と橢圓		16
『中村草田男訪問記』ブックレットに		16
寄贈感謝・会員名簿・北極星		16
第5号		
ならば天間のみよ子欲し		1
〈回想の成田千空〉		
私の愛誦句	中村雅之	2
千空さんと川柳	野沢省悟	3
千空、高橋竹山を詠む	佐藤陽子	5
〈作品鑑賞を読む〉		
④酷寒の迅脚の牛怖しや	小川国夫	7
父・米田一穂と千空 青森萬緑会通信句会誌	米田省三	8
『未来』を中心として(4)		

千空俳句の礎③	西谷ともえ	9	〈千空点描〉第1回文学賞	千空さんと、戦死した兄と	佐々木達司	4
〈千空点描〉じゃわめぐ		9	〈作品鑑賞を読む〉	〈千空点描〉句集名付けの秘密		4
永住の地五所川原 成田千空をめぐる人々④	齋藤美穂	10	⑥砂山は狼いろに枯れゆく	千空資料研究①		5
青森県文芸協会と成田千空		13	〈成田千空資料再録〉⑦	「青嶺」創刊十五周年大会記念講演	西谷ともえ	5
歳時記に採られた千空句④『萬緑季寄せ』		14	『暖鳥』某月某日／後日譚／『陸奥新報』石語抄(一)／	永住の地五所川原 成田千空をめぐる人々⑧	齋藤美穂	6
〈成田千空資料再録〉⑤		16	『萬緑』草田男句集鑑賞―ノート途次―「銀河依然」	「暖鳥文庫」からのスタート	飯田龍太	7
俳誌『沖』俳句の風土性		16	について／『東奥日報』一すじに「人間探求」草田男	〈作品鑑賞を読む〉		7
俳誌『暖鳥』を撮影／『千空句帖』の刊行を準備		2	流にあがいてみたい『暖鳥』同人 成田千空	⑧五月来る空の色のインク壺		7
寄贈感謝・会員名簿・北極星		16	『千空句帖』青森の文学を応援する会編	〈成田千空資料再録〉⑨		9
第6号		1	会員名簿・北極星	『萬緑』師・中村草田男の千空句評②		12
ふかうら文学館 千空の間		2	第8号	寄贈感謝・会員名簿・北極星		1
千空、最初の句集『海流』		3	千空さんの方言詩―千空句版画―	大根やどうともせよと横たはる―千空句版画―	藤田健次	2
〈回想の成田千空〉	草野力丸	3	虫と孤独『千空句帖』を読む	第10号		2
「件」の人たち		5	〈回想の成田千空〉	県近代学館川柳大会の属目吟	野沢省悟	3
父・米田一穂と千空 青森萬緑会通信句会誌	米田省三	6	六月の岬	千空さんの背広	齋藤美穂	4
『未来』を中心として⑤		7	〈作品鑑賞を読む〉	「今日を断ちわたしの前にあるレモン」について		10
千空俳句の礎④	西谷ともえ	8	⑦煮蛸の一つ二つは口割らず	千空資料研究②		11
永住の地五所川原 成田千空をめぐる人々⑤	齋藤美穂	9	中村草田男碑建立まで	「昭和四十四年日記」より(上)	西谷ともえ	12
青森県文芸協会と成田千空(続)		11	永住の地五所川原 成田千空をめぐる人々⑦	永住の地五所川原 成田千空をめぐる人々⑨	齋藤美穂	16
〈千空点描〉若山牧水の杯で飲む	神林信一	13	飯詰時代の意義(二) 俳句とともに生きる	五所川原俳句会の設立と隆盛		16
〈作品鑑賞を読む〉		16	〈千空点描〉兜太と千空	〈千空点描〉草田男短冊は千空の書		16
⑤病む母のひらがな言葉露の音		16	私が「成田千空論」を書けない訳	〈作品鑑賞を読む〉		16
〈成田千空資料再録〉⑥		16	〈成田千空資料再録〉⑧	⑨暮れがたく暮れゆく野づら桜桃忌	友岡子郷	16
『暖鳥』「内」なるもの／ひとりごと／自分のこと・人		16	『萬緑』師・中村草田男の千空句評①	〈成田千空資料再録〉⑨		16
のこと／季節に関する様々な想念の一つ／私信		16	『俳句研究』津軽のわが俳句仲間	『萬緑』師・中村草田男の千空句評③		16
寄贈感謝・会員名簿・北極星		16	『萬緑合同句集』2	寺山修司を詠んだ千空句		16
第7号		16	会員名簿・北極星	寺山修司と成田千空		16
少年の日がよみがえる―千空句版画―	藤田健次	1	第9号	陸奥野辺地社 中芭蕉二百回忌追善興行	舘田勝弘	16
『文藝春秋』掲載の千空俳句		2	萬緑や目屋人形はみな乙女―千空句版画―	翻刻・解説		16
千空俳句の礎⑤	西谷ともえ	3	〈回想の成田千空〉	寄贈感謝・会員名簿・北極星		16
永住の地五所川原 成田千空をめぐる人々⑥	齋藤美穂	4	千空さんの瞳			16
飯詰時代の意義(一) 帰農生活		4	不思議な縁 千空さんの思い出			16

第11号

薔薇いろの火となりストーブ列車発つ―千空句版画―

藤田健次 1

〈回想の成田千空〉

矢須恵由 2

成田千空氏と茨城

没後10年、注目される俳人 千空

没後10年、千空を語るイベント

「折々のうた」の千空句

千空資料研究③

「昭和四十四年日記」より〈下〉

〈作品鑑賞を読む〉

⑩我もまた津軽のお父や暖炉汽車

五所川原俳句会 続

千空さんと短歌／随筆「短歌の山河」千空

寄贈感謝・会員名簿・北極星

第12号

晩 春―千空句版画―

千空没後10年、おもな出来事

『わが心の〈千空〉』を刊行

『陸奥新報』新企画連載始まる

〈回想の成田千空〉

千空先生のお褒めの言葉は

土曜えっせー

〈千空点描〉贈られた句集の山

〈作品鑑賞を読む〉

⑪雪よりも白き骨これおばあさん

永住の地五所川原 成田千空をめぐる人々(II)

五所川原俳句会 最終回

千空資料研究④

「千空自句自解」より〈上〉

〈成田千空資料再録〉⑪

読売新聞コラム／『萬緑』家／第1回萬緑賞選定

「陸奥野辺地社中 芭蕉翁二百追善法要」顛末記

寄贈感謝・会員名簿・北極星

第13号

明日知らぬ我そして君君子蘭―千空句版画―

〈回想の成田千空〉

千空忌を中心に

「サンキュー」

「暖鳥」周辺

〈千空点描〉書店は、わが人生の窓

千空資料研究⑤

「千空自句自解」より〈下〉

永住の地五所川原 成田千空をめぐる人々(II)

太宰治と成田千空

〈成田千空資料再録〉⑫

『俳句』永遠の青春性『俳句研究』原感情を大切に

寄贈感謝・会員名簿・北極星

第14号

夏山の風を貰ひてにぎり飯―千空句版画―藤田健次

〈回想の成田千空〉

縁は不思議である

千空先生に俳句を習う①

俳句は一人称の文学

寺山修司と成田千空

〈千空点描〉千空という俳号

〈作品鑑賞を読む〉

⑫禿頭と白頭われら露明り

〈小特集 兜太と千空〉

前衛俳句の兜太と伝統の千空

金子兜太と成田千空

〈成田千空資料再録〉⑬

戦後作家展望(二) 金子兜太／兜太俳句についての感想

佐渡旅行記・佐渡へ 20句

寄贈感謝・会員名簿・北極星

第15号

今生を燃えよと鬼の佞武多来る―千空句版画―

千空さんと出会う小さな旅

―ふかうら文学館見学記―

千空俳句に影響を与えた義兄

岡田晴一の郷土史研究

千空俳句の原郷・十三潟

県近代文学館特別展「平成の青森文学」鑑賞記

千空との新たな再会に

千空先生に俳句を習う②

師弟碑建立のお知らせ

千空資料研究⑥

「昭和六十二年日記」より〈上〉

〈千空点描〉上京のひそかな楽しみ

〈作品鑑賞を読む〉

⑬引き潮の力もて去る佞武多かな

〈成田千空資料再録〉⑭

川柳と千空

寄贈感謝・会員名簿・北極星

第16号

恋をせよ旅をせよと実むらさき―千空句版画―

千空先生に俳句を習う③ 季節と時事

太宰治に魅せられて

〈千空点描〉盃かたむけ文学談義

千空の受賞歴をめぐって(1)俳人協会賞

〈作品鑑賞を読む〉

⑭土偶みな寝に帰りたき秋の山

有馬朗人

〈成田千空資料再録〉⑮ 7

現代俳句と風土／初学の志向／私の代表句「大粒の雨」
私の作句三か条「好句の条件」エッセイ「百歳の俳人
いつか見たい」

寄贈感謝・会員名簿・北極星 12

第17号

大初日鵬のごとのぼりくる――千空句版画―藤田健次 1
千空の受賞歴をめぐって② 齋藤美穂 2

蛇笏賞・詩歌文学館賞 齋藤美穂 2

『現代俳句集Ⅱ』について 西谷ともえ 4

千空先生に俳句を習う④師とは何ぞや 世良 啓 5

〈千空点描〉鼠は、千空の泣きどころ 4

〈作品鑑賞を読む〉

⑮寒中の紫蜺を寸志とす 黒田杏子 6

⑯暗緑を出て百光の那智の滝 小原啄葉 10

千空資料研究⑥

〈成田千空資料再録〉⑯千空 雪の俳句 7

「天地人」に千空句集『人日』引用 10

お礼とお知らせ／評伝・合本句集の概要 11

寄贈感謝・会員名簿・北極星 12

第18号

さなぶりの川ゆつくりと日が暮れる――千空句版画― 藤田健次 1

〈回想の成田千空〉

千空さん「津軽のふるさと」を歌う 木村直美 2

千空先生に俳句を習う⑤ 世良 啓 3

うつくしいことば 清水哲男 4

作品鑑賞を読む⑯ 齋藤美穂 5

菜の花の地平や父の肩車 齋藤美穂 5

新資料とともに(1)五所川原の千空句碑 7

〈成田千空資料再録〉⑯

私の中の戦争／千空 酒の俳句

陸奥新報が社説で論評

『成田千空伝』『合本成田千空句集』

寄贈感謝・会員名簿・北極星

第19号

野も山も青し天間のみよ子欲し――千空句版画― 藤田健次 1

新資料とともに(2)社会性俳句ブームの陰で齋藤美穂 2

宮川翠雨と暖鳥俳句(上) 西谷ともえ 3

千空先生に俳句を習う⑥ 一期の吟行、一会の座 世良 啓 4

座談会「千空研究―これまで・これから」

齋藤美穂・世良啓・西谷ともえ・佐々木達司 6

〈成田千空資料再録〉⑯

特輯 戦後青森県の文学状況 俳句界の動向

千空 俊武多の俳句 13

〈作品鑑賞を読む〉⑯ 雨の日は雨を力に大青田 深谷義紀 14

『成田千空伝』『合本 成田千空句集』 出版記念会開かれる 15

寄贈感謝・会員名簿・北極星

第20号(今号、第1ページにあり)

執筆(引用)者索引

丸数字は号数

【あ】 浅利康衛…②

阿保子星…③

有馬朗人…⑯

飯田龍太…⑨

石崎志亥…⑧

泉風信子…④

市川栄次…⑦

大岡 信…④

大串 章…⑭

小川国夫…⑤

小原啄葉…⑯

上條勝芳…①

金子兜太…⑭

兼平一子…⑧

鎌田美正子…⑯

【き】 神林信一…⑥

北野民夫…②

木村武彦…②

木村直美…⑯

京武久美…⑩

草野力丸…①⑥

櫛引麗子…③

工藤清泰…⑮

黒田杏子…⑫⑯

小池淳一…③⑧

【さ】 齋藤美穂…①⑯

佐々木あさ子…①

佐々木達司…①⑯

佐々木とみ子…③

【し】 櫻庭利弘…①

佐藤 繁…⑨

佐藤陽子…⑤

清水雪江…①

【せ】 世良啓…④⑭⑯

高井まさ江…⑫

高橋睦子…①

高松玉麗…⑦

武田伸一…⑪

館田勝弘…⑩

田中和弘…②

辻 桃子…⑯

【て】 寺山修司…⑩

徳才子青良…②

友岡子郷…⑩

【に】 中村雅之…⑤

中村弓子…④

鳴海顔回…⑭

【の】 西谷ともえ…②⑯

野沢省悟…⑤⑩

【は】 浜田しげる…⑨

【ふ】 深谷義紀…⑯

藤田健次…①⑦⑯

藤埜まさ志…⑬

【ま】 米田省三…②⑥

【み】 未津きみ…⑬⑯

【や】 宮津昭彦…⑮

矢須恵由…⑪

山内ひろ子…⑫

山本こう女…⑬

寄 贈 感 謝

浅利康衛さん（青森市）『まほろば』9・10・11月号
清水雪江さん（藤崎町）寄付金

訃 報

泉 風信子さん（会員・県俳句懇話会副会長）9月29日逝去
されました。84歳。謹んで哀悼の意を表します。

【備忘録】

『俳句』平成20年6月号から
津軽のじよっぱりを忘れず—成田千空を偲ぶ会

昨年（平成19年）、十一月十七日に逝去した成田千空氏を偲ぶ会が、「萬緑」運営委員会・偲ぶ会実行委員会の主催で、（平成20年）三月三十日（日）、墨田区・東武ホテル・レバント東京で催された。

参加者による献花ののち、奈良文夫「萬緑」選者が開会の挨拶を述べた。ついで来賓の金子兜太氏、宇多田喜代子氏、黒田杏子氏の挨拶。金子氏は、終生、津軽の風土を詠み続けた千空氏の反骨精神、「じよっぱり（情張）」という当地の言葉で評し、思い出を語った。

また、「成田千空の世界」と題したビデオと千空氏の通夜における「萬緑」発行人中村弓子氏の弔詞の映像が上映され、参会者の涙を誘った。渡辺香根夫氏の講話、千空夫人市子氏の挨拶の後、平井さち子氏が閉会の辞を述べ、散会となった。

写真（省略）は、前列左座席から中村弓子氏、宇多田喜代子氏、金子兜太氏、黒田杏子氏、後列左から千空氏実妹荒谷信子氏、成田市子氏、奈良文夫氏。

（グラビア「俳壇ヘッドライン」）

会員名簿（63名）

〈青森市〉 浅利康衛、荒谷信子、齋藤光子、佐藤陽子、高森ましら、中嶋義雄、成田市子、西谷ともえ、野沢省悟、野村正彦、浜田しげる、未津きみ、吉田州花
〈弘前市〉 阿保子星、石崎志亥、市田由紀子、鎌田義正、後藤 隆、佐藤 繁、館田勝弘、土田紫翠、成田圭子、三上弘之
〈黒石市〉 鳴海顔回
〈藤崎町〉 清水雪江、世良 啓
〈八戸市〉 上條勝芳、小林凡石、仁科源一、藤田健次
〈十和田市〉 米田省三
〈五所川原市〉 会津明郎、荒閑映子、一戸 鈴、葛西幸子、木津谷絹子、櫛引麗子、齋藤美穂、櫻庭利弘、佐々木あさ子、佐々木達司、高橋睦子、奈良知治、浜田十三、松宮梗子、山内ひろ子
〈板柳町〉 木村玲子
〈中泊町〉 外崎文夫
〈つがる市〉 兼平一子、工藤清泰、中村雅之
〈深浦町〉 草野力丸、山本こう女
〈岩手県盛岡市〉 瀬川君雄
〈茨城県那珂市〉 永山憲子、寺門資子、矢須恵由
〈茨城県水戸市〉 糟谷雅枝、小泉光子
〈茨城県日立市〉 高井まさ江
〈千葉県流山市〉 藤埜まさ志
〈神奈川県横浜市〉 許勢元貞
〈大阪市〉 川東郁代

2019年会費領収しました（第19号以降、敬称略）

川東郁代、木津谷絹子、小林凡石、齋藤光子、清水雪江、藤田健次。

☆北極星☆

○藤田健次さん、終刊号の表紙版画は「女房や湯気の句ひの年の暮」である。千空俳句のエロチシズムはつとに知られているが、「あの真面目な千空が？」と意外に思う方もあるかも。ほかに「艶笑譚雪ゆ曲々林檎の木」「腰太き南部日盛農婦かな」などの句がある。師の中村草田男にも「妻抱かな春昼の砂利踏みて帰る」「妻二之夜あらず二夜夜の天の川」などの妻恋いの句がある。

○未津きみさんが『文芸あおもり』の「千空対談」を読んで、——回想のなかの人々——を寄稿された。千空・服部進・中寒二・村次郎と、まさに県文壇史の一ページを見る思いがする。

○鎌田美正子さんの「千空俳句入門」は、『合本 成田千空句集』を分析した、新しい試みである。

○千空資料再録は、「太宰治と俳句について」と「昭和俳句の命題」を掲載した。前者は千空俳句に影響を与えた郷土の作家の俳句を読み解き、後者は人間探求派の俳人・中村草田男に惹かれた原点である。

○今号で20号となった。終刊号なので、「総目次」と「執筆者索引」を付して、検索できるようにした。これまでのご支援を心から感謝します。

2019年11月20日発行
会報『千空研究』第20号 終刊号

非売品（会員配布）

発行 俳人 成田千空研究会
佐々木 達 司

〒037-0004

五所川原市唐笠柳藤巻467

青森文芸出版内

TEL 0173-355-5323
FAX 0173-355-8414

千 空 の 本

成田千空伝

齋藤美穂

—大粒の雨降る青田母のくに—

亡くなってから12年、「東北に千空あり」と言われた俳人の評伝ができました。太宰治、中村草田男、寺山修司、金子兜太との関わりなど興味ぶかい内容です。

A5判・261頁・2500円＋税



没後12年、風土俳人の評伝成る

永住の地五所川原／太宰治、中村草田男、寺山修司、金子兜太との関わり／俳壇に確かな足跡

青森文芸出版／定価2500円＋税

合本成田千空句集

俳人成田千空研究会編

千空句集が1冊になりました。「総索引」によって探している句が見つかります。20歳で俳句を始めて注目され77歳で蛇笏賞、86歳で亡くなるまでの作品を収める。

A5判・262頁・2500円＋税



蛇笏賞受賞俳人の句集を1冊に！

「地雲」「人日」「天文」「白光」「忘年」「十方吟」と没年の作品、3000句あまりを収録。

青森文芸出版／定価2500円＋税

青森文芸ブックレット

中村草田男訪問記 成田千空

師草田男との関係を綴る初期資料。『暖鳥』掲載「中村草田男訪問記」および元原稿の日記、「原始の響き―草田男先生同行記」の3編を収める。

定価463円＋税



千空句帖 成田千空

戦時中に句集が手作りされていた。封印されていた235句を影印版（直筆）で公開。解説・西谷ともえ、文学で青森を応援する会編。

定価1000円＋税



わが心の〈千空〉 俳人成田千空研究会編

没後十年、親しかった俳人・歌人・画家などが綴る思い出。「千空研究」連載の二十四編は、稀なる才能と人間像を浮き彫りにする。必読の一冊。

定価870円＋税



成田千空句集

地 第1句集

靈

1800円＋税



人 第2句集

日

1800円＋税



天 第3句集

門

1500円＋税



白 第4句集

光

1800円＋税



矢本大雪編

千空歳時記

3000円＋税